

令和 5 年 5 月 16 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K03329

研究課題名（和文）幼児・児童の感情言及がもつ関係調整機能に着目した他者理解の発達の検討

研究課題名（英文）The function of emotional references in regulating interpersonal relationships in early and middle childhood: A study on the development of children's understanding of others

研究代表者

岩田 美保（Iwata, Miho）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：00334160

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼児・児童期の他者理解について、社会的文脈における子どもの自他感情言及とその関係調整的役割に主な焦点を当て、発達の検討を行った。具体的には（1）幼児期の仲間間のポジティブ・ネガティブな感情言及の関係調整的機能、（2）異なる関係性の中での感情言及文脈の発達の様相の違い、（3）児童間の話し合い初期の教師の助言的介入及び感情コミュニケーションに関わるテーマ内容について検討した。総じて、幼児がポジティブ感情言及及び、遊戯的なネガティブ感情言及を通じ仲間関係の調整を図っている様相や、児童の自主的な話し合いが成立していく中で、多様な感情的テーマを含むやりとりがなされている可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、幼児の社会的場面でのポジティブ・ネガティブな感情言及が果たす対人的機能を明らかにしうるものであり、感情コンピテンスや社会的文脈における他者理解の発達の様相を捉えうる子ども同士の社会的相互作用に関わる基礎的資料を提供するものとして大きな意義がある。また、児童期の感情コミュニケーションに関わる話し合いのテーマや自主的な話し合いを成立させる教師の介入などの基礎分析の成果は、今後児童期の話し合いにおける感情言及を含むコミュニケーションの実態を通じ、児童期の社会的なやりとりにおける感情言及と関係調整の関係を明らかにしていく上で重要と考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study is a developmental examination of children's understanding of other people during early and middle childhood, primarily focusing on the children's emotional references in social contexts and relational-regulatory role. Specifically, the study examines (1) the relational coordinative function of positive and negative emotional references between peers in early childhood, (2) differences in the developmental aspects of emotional reference contexts in different relationships, and (3) teachers' advisory intervention in the early stages of discussions between school children and the thematic content related to emotional communication in the discussions. The results of this study are summarized as follows. In general, the results indicated that young children adjust in peer relationships through positive and playful negative emotional references, and that school children may interact with a variety of emotional themes in the course of taking voluntary discussions.

研究分野：発達心理学

キーワード：感情言及 感情語 感情コンピテンス 対人的機能 他者理解 社会的文脈 社会的相互作用 関係調整

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまで子どもの他者理解の検討は、実験的な知見を中心に(J. Piaget; H. Wimmer & J. Perner; 子安, 等)、幼児期から児童期中期にかけて深まることが示されてきた。他方で、日常的な場面では、子どもが2歳頃から自他の感情等の内的状態に言及し始めることや、そうした感情言及を伴う身近な他者とのやりとりが、子どもの他者理解の発達の重要な基盤となる可能性も指摘されてきた(Bretherton & Beeghly, 1982; Dunn, Brown, & Beardsall, 1991, 等)。しかしながら、幼児期以降、児童期にかけての日常文脈での感情言及を伴うやりとりに焦点をあて、他者理解の発達について実証的な検討を行った研究は未だ少ない。同時に、社会文化的な視点からは、感情言及を伴うやりとりがなされる関係性の質や、言及の機能(Dunn & Brophy, 2005; Dunn, 2008; 内藤, 2007)をもふまえた検討が待たれるところである。

一方、感情コンピテンスの発達の視点からも、そうした感情言及を含む、園や学校、家庭といった日常文脈での感情に関わる多様なやりとりの意義が示されてきた(Buckley & Saarni, 2009; Saarni, 1999)。なかでも、ポジティブな感情は、対人関係の発展に寄与しうるものであること(Izard, 1977, 1991; Fredrickson, 2001; Seligman, 2002)、また、ネガティブな感情は、対人間葛藤の見直しや解決において重要な意味をもつものであることなども指摘されている(Lagatutta & Wellman, 2002; Dunn, 2008)。園や学校、家庭での身近な他者との間にみられる、幼児・児童のそうした感情言及の様相について、それがいかなる対人的機能を果たしているかという点に着目して検討を行うことは、同時期の社会的やりとりが可能にしうる、他者理解の発達過程を捉えていく上で、極めて重要と考えられる。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、幼児・児童の他者理解について、社会的場面での子どもの感情(特にポジティブ・ネガティブ感情)言及がもつ関係調整機能のプロセスをふまえて発達の検討を行うことである。具体的には、①幼稚園児の仲間遊び場面、②小学校の「特別活動」授業時の児童間の話し合い場面、③幼児・児童の三世代を含む家族の食事場面、に着目し、幼児・児童の感情(特にポジティブ・ネガティブ感情)言及がそこでの関係調整にどのような機能を果たしているかについて発達の検討をする。これらを総合し、幼児・児童期の社会的やりとりが可能にしうる他者理解の発達プロセスについて仮説を提出する。

3. 研究の方法

(1) 園での仲間間の感情言及に関わるやりとりの検討

首都圏の幼稚園において、継続的に観察を行った。観察は、概ね1か月に2回の割合で行われ、朝の自由遊び時間(約2時間)の室内及び屋外(一部の遊具に限定)での3~5歳児の仲間同士(2名以上)のやりとりについて参与観察を行った。観察方法は、筆記記録を基本とし、毎回フィールドノートを作成した。また、補助的に音声記録(ボイスレコーダー使用)を併用した。これらの観察記録に基づき、幼児間のやりとりについてプロトコルデータを作成し、仲間遊びにおける感情言及に関わるやりとりの内容について検討を行った。

(2) 小学校での児童間の感情言及に関わるやりとりの検討

首都圏の小学校において、特別活動での児童間の話し合い場面の観察を行った。観察の記録は、映像記録、音声記録、筆記記録を状況に応じて行った。また、観察内容について、毎回フィールドノートを作成した。それをもとに、プロトコルデータを作成し、児童間のやりとり(一部教師の介入含む)について分析を行った。

(3) 家族間の感情言及に関わるやりとりの検討

首都圏在住の三世代家族のやりとりについて、非参与観察を行った。撮影はビデオカメラを事前に家族に提供した上で依頼し、観察のスケジュールは、家族の都合を最優先とし、無理のない範囲で依頼した。本研究期間は、その映像データをもとに、プロトコル化と、やりとりの内容についての予備分析を進めた。

4. 研究成果

(1) 幼児期の感情言及と関係調整プロセスについての検討

本研究期間においては、幼児期の感情言及と関係調整プロセスに特に焦点をあて検討を進めた。

① 幼稚園児の遊戯的なネガティブ感情言及についての縦断的検討

幼児がネガティブ感情言及をネガティブな意味のみならず、いかにポジティブな文脈で関係調整的に用いるかという観点に基づき、幼稚園の3歳児クラス期から4歳児クラス期にかけての2年間の仲間遊びでの遊戯的なネガティブ感情言及について、言及状況とその関係調整的役割に着目し、縦断的な検討を行った。

Table1 3歳児クラスから4歳児クラスにかけての遊戯的なネガティブ感情言及に関わる言及状況(時期別)

	3歳児クラス期		4歳児クラス期		Total
	4月～9月	10月～3月	4月～9月	10月～3月	
①遊戯的反応		4	1	3	8
②注意喚起		1		1	2
③禁止/阻止		5	2	3	10
④否定的判断/意見		1		6	7
⑤促し/必要性				3	3
⑥遊び設定	1		1	2	4
⑦反省・自嘲的				4	4
⑧遊戯的発言/セリフ			1	2	3
⑨経験の振り返り				1	1
Total	1	11	5	25	42

注. 遊戯的なネガティブ感情言及が複数の言及状況に当てはまる場合は複数の内容にカウントしたため、ここでの合計数とやりとり事例数は同一ではない。

なお、本検討における、遊戯的なネガティブ感情言及で用いられたネガティブ感情語については、3歳児クラス期では、「だめ」「こわくない」「ずるい」「あぶない」の4種類、4歳児クラス期では、「やだ」「いや」「だめ」「あぶない」「うるさい」「こわい・こわかった」「怒っちゃう」の7種類であった。

結果として、遊戯的なネガティブ感情言及に関わる言及状況(Table2)として、3歳児クラス期の前期では、遊び設定やイメージの違いを遊戯的に伝達する(⑥遊び設定)状況での言及が2者間のやりとりでみられた。一方、後期では、保育者の遊戯的な働きかけに対する(①遊戯的反応)状況のほか、保育者や仲間の行動を遊戯的に阻止する(③禁止/阻止)状況等、複数の仲間同士や傍観者の仲間同士で遊戯的なネガティブ感情言及がみられるようになった。

4歳児クラス期の前期では、(⑧遊戯的発言/セリフ)、後期では、(⑤促し/必要性)(⑦反省・自嘲的)(⑨経験の振り返り)状況での言及が新たにみられ、困難や苦しさ、スリルや怖さ等、ネガティブ感情に関わる状況設定を楽しいものとして共有するような状況や、反省・自嘲的及び経験の振り返りに関わる状況を含む多様な状況で仲間同士の遊戯的なネガティブ感情言及が自主的になされるようになった。

総じて、それらの言及は、仲間との親密な関係や遊びの共有を深めたり、仲間間で生じる緊張状態を緩和したりし得る関係調整的な役割を果たしていることが示唆された。

なお、本成果については、「保育学研究」誌において論文報告を行った(「園の仲間遊びにおける遊戯的なネガティブ感情言及についての発達の検討-3歳児クラス期から4歳児クラス期の変化に着目して-」岩田, 2021)。

② 幼稚園期のポジティブ感情言及(「かわいい」)についての縦断的検討

これまでの筆者の検討から、幼児のポジティブ感情言及としての「おもしろい」「楽しい」への言及が仲間間の関係構築において重要な役割を果たしている可能性が示された(岩田, 2019a)。本研究では、仲間関係を繋ぐ、愛情(affection)や相互的な関心(Dunn, 2004; Howes, 2009; Izard, 1991/1996)に関わる表現や共有を可能にするポジティブ感情語の一つとして、感情語「かわいい」への言及に着目し、幼児の仲間遊びでの言及状況と、その

関係調整的役割に焦点をあて、3~4歳児クラス期のやりとりについて縦断的検討を行った。

仲間遊びでの「かわいい」への言及状況について、仲間との関わりと、言及内容に基づき分類を行った(Table3)。これらに基づき、言及プロセスについて検討したところ、3歳児クラス期前期では、仲間との並列的な関わり(I)で、保育者を媒介とし、仲間の存在にも影響を受ける中で言及がみられた。3歳児クラス期後期からは、仲間直接向けられたものではあるが、一方が主導する形(II)での「アピール」や「共感」、4歳児クラス期前期の「擁護」、さらに、仲間同士の相互関係的なやりとり(III)としての「実現化(評価)」といった状況で言及がみられるようになった。そうした相互関係的なやりとりでの言及は、4歳児クラス期以降さらに多様になり、「同意」や「遊戯的」、対象物の「価値づけ」、対象(ものや人)への「愛着共有」といった状況で、「かわいい」

Table2 仲間遊びにおける「かわいい」への言及状況
【I. 並列的】 ：直接的ではなく、保育者の応答を介した仲間との並列的な関わりの中で言及がなされるもの(下位カテゴリーなし)
【II. 関係的(一方主導)】 仲間との関わりで一方が主導し(あるいは明確には相互合意的ではない形で)、伝えたり働きかけたりするような状況で言及がなされるもの
アピール ：仲間に「かわいい」ものや対象を対抗的にアピールするような言及
共感 ：仲間に「かわいい」ことへの共感を通じて働きかけるような言及
擁護 ：仲間に対して対象を一方的に擁護するような言及
【III. 相互関係的】 ：仲間同士の相互的な関わりの中で、「かわいい」への言及がなされるもの
同意 ：相手とつながり呼応的に「かわいい」と述べたり、その確認や同意が共感的になされたりするような言及
遊戯的 ：仲間間で遊戯的になされるセリフ的言及
価値づけ ：仲間内で対象物を特別な価値あるものとして用いるような言及
価値づけ(ごっこ遊び) ：ごっこ遊びの中で、対象物等が特別な価値のあるものとして用いる(「お客さん」をひきつける)、またはその価値づけに関わる言及
実現化(評価) ：仲間の「かわいい」ものを作る実現化に対して評価的意見を述べるような言及
実現化(協同) ：「かわいい」ものの実現化に向けて仲間間で協同的に用いるような言及
実現化(意外性) ：仲間の視点をふまえた、「かわいい」ものとそれがもつ意外性の実現化に向けて用いるような言及
実現化(関係拡張) ：「かわいい」ものを作ることで誘いかけるなど関係拡張的に用いるような言及
愛着共有(物) ：対象(もの)に関する心情(愛着)の伝達・共有に向けた言及
愛着共有(対人) ：対象(人)に関する心情(愛着)の伝達・共有に向けた言及

への言及がみられるようになった。

仲間との関わり	3歳前期	3歳後期	4歳前期	4歳後期
I. 並列的		●(★)		
II. 関係的 (一方主導)				
アピール	●(★★)	●		
共感		●(★)		
援護			●	
同意		●(★★)	●(★)	
III. 相互関係的				
遊戯的 (ゲーム的)			●	
遊戯的 (ゲーム的) 価値づけ			●(★★)	●(★)
価値づけ (ごっこ遊び)			●(★★)	●(★★)
実現化 (評価)		●		
実現化 (協同)			●	●(★)
実現化 (意外性)			●	
実現化 (関係拡張)				●
愛着共有 (物)				●
愛着共有 (対人)				●(★★)

注 ●の数が当該学年(X学年)の事例数。カッコ内は言及状況抽出にあたり比較対象としたY学年(★)とZ学年(☆)の事例数を示した。(遊戯的(ゲーム的))は、相手とつながり呼応的に「かわいい」と述べあうことがゲーム的になされるもので、Y学年のみみられたが参考までに示した。

こうした結果から、3歳児クラス期前期における保育者の介在した状況での、萌芽的な言及段階を経て、子どもたちが「かわいい」への言及を関係調整的に用い始めるようになるのは3歳児クラス後期からであり、同時期には一方主導的な言及も含まれるといえた。さらに4歳児クラス期になると、子ども同士が同言及をより明確に関係調整的に用いるようになり、人やものなどの対象物に感じとる愛らしさを伝え合ったり、「かわいさ」をもつものを価値つけて遊びに用いたり、ものや人への愛着を仲間間で共有したりするようになることが示唆された。これらは、子どもたちが、感情語(「かわいい」)を、重要な仲間関係の中で、多様な機能

をもって有効に用い、良好な関係を形成していく様相を示しており、感情言及を軸とした感情コンピテンスの発達の観点から重要な結果といえる。

ところで、これまで、幼稚園期の仲間遊びでの「おもしろい」、「楽しい」への言及に関わる岩田(2019a)の検討では、よりおもしろい遊びの実現に向けた状況設定等に関わる状況(「実現化」)での言及(暗くしたほうがおもしろい、等)がみられたのは5歳児クラスの11月~3月(5期)であった。一方、本分析での「実現化」は「かわいいものを作る」状況であり、完全な比較は難しいものの、「かわいい」への言及を通じた「実現化」のやりとりが、3歳児クラス後期の「実現化(評価)」、さらに、4歳クラス期以降、「実現化(協同)」、「実現化(意外性)」、「実現化(関係拡張)」と、より早期から多様にみられる可能性が示唆された。この結果は、ポジティブ感情語の違いによって、実現化に関わるやりとりに時期的な違いが生じ、「かわいい」という感情が、子どもたちにより身近にそうした実現化の機会を提供するものになっている可能性が示唆されるものとして興味深い結果といえる。なお、本成果については、「保育学研究」誌において論文報告を行った(「園の仲間遊びでのポジティブ感情表現としての「かわいい」への言及-その関係調整的役割に着目した3~4歳児クラス期の発達の検討-」岩田, 2022)。

③ 幼稚園児の感情言及文脈(男児間・女児間)の縦断的变化

幼児の感情言及がなされる仲間遊び文脈やその変化過程については、遊び仲間の関係性の違い(男児間および女児間)で異なる可能性がある。こうしたことをふまえ、本報告では、3歳児クラス期から4歳児クラス期の仲間遊びでのやりとりの縦断的データをもとに、男児間および女児間それぞれにおける感情言及文脈の変化について検討を行った(岩田, 発心大会, 2021)。

3歳児クラス期から4歳児クラス期にかけての男児間および女児間それぞれにおける感情言及がなされた仲間遊び文脈の変化をFigure1に示した。2年間の感情言及全体数の変化としては男児間、女児間それぞれにおいて有意な増加がみられた($p=0.00$, $p=0.01$)。

また、3歳児クラス期から4歳児クラス期にかけての感情言及がなされた仲間遊び文脈に偏りがみられるかについて、女児間について、時期(2)×感情言及文脈(5)の χ^2 検定を行った。その結果、女児間の2時期の感情言及文脈には偏りがみられ($\chi^2(4)=17.28$, $p<.01$)、3歳児クラス期において、(①遊び(ふり以外)の共有)

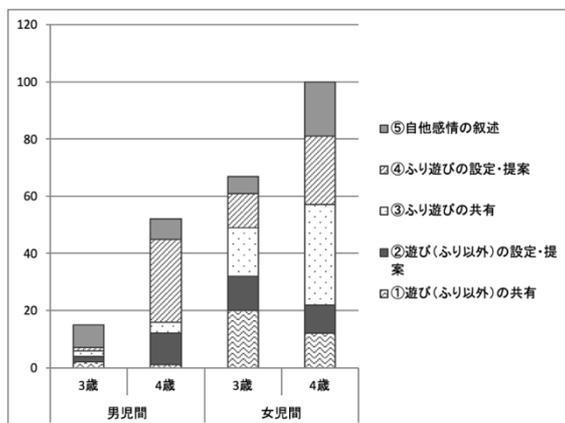


Figure1.3歳児~4歳児クラス期の仲間遊びでの感情言及文脈の縦断的变化(男児間・女児間別)

での感情が語られる状況文脈や発達時期については、その様相が男児間と女児間で大きく異なることが示唆された。こうした異なる関係性と感情言及の様相については引き続き詳細な検討が必要である。

(2) 児童期の話し合い場面での関係調整的やりとりに関わる基礎的検討

本研究期間では、低・高学年学級の児童間の話し合い場面についてデータ収集および、基礎データの整備を行いながら、関係調整的コミュニケーションの成立を支える教師の助言的介入や、感情コミュニケーションに関わるテーマに焦点をあて、基礎分析を進めた。

① 高学年学級の話し合い開始期における教師の助言的介入に関する検討

話し合い開始期において、児童たちが話し合いの進行そのものに困難を抱える状況が少なくなく、教師が多様な助言的介入を行っていたこと（岩田・佐藤，2019）をふまえ、5年学級および6年学級の特に困難が予測される、話し合い開始期（1か月間）の教師の助言的介入の様相に焦点をあて、検討を行った（岩田，教心総会，2020）。

Table4 5. 6年学級の児童の話し合い開始期における教師の介入の内容

議題の種類	6年A学級(5月)		5年B学級(7月)
	1回目	2回目	
議題の選定	1		1
話し合いの流れ	1	(3)	4
話し合いルール		1	1
話し合いの論点			2(1*)
決定方法	1	1(1)	(1)
決定方法(技術)			
感情的側面			2

注1. 複数の内容に該当する場合はそれぞれに分類した。
注2. 括弧内は児童の発言へのフィードバック(*印は肯定的フィードバック)を含むもの。括弧内外の合計数が総介入数。

学級全体としての自主的な話し合いが開始されたばかりの5年B学級（7月）では、【話し合いの流れ】【話し合いの論点】【感情的側面】【話し合いルール】【決定方法】について教師の助言的介入がなされていた。特に、話し合いの進行そのものに関わる【話し合いの流れ】（「1番チームの人。1番の人、手あげてください。確認しましょう」等）、【話し合いの論点】（「あと1個考えてほしいのは（中略）クラスの約束です。これいいことだっていいんだよ」等）については、それぞれ複数回（順に4回、3回）の介入がみられた。

5年B学級では、それまで、ペアやグループの話し合いが中心であり、学級全体の話し合いが開始されたばかりの当該の状況では、話し合いそのものの進行に関わるスキルが必要であったことが推察される。また、教師の介入のうち、【話し合いの論点】【決定方法】については、児童の発言に対するフィードバック介入も含まれた。特に【決定方法】については、肯定的なフィードバックがなされ（「さっき議長の人上手だね、完全にだめじゃなくて。確かにいい意見言っていました」）、当該のやりとりでみられた児童の決定のあり方を教師が評価していることが推察された。

一方、6年A学級においては、学級全体の話し合いが5年B学級（7月）と比べて早期（5月）から開始された。開始期（1回目、2回目）を通してみると、話し合いの進行に関わる【話し合いの流れ】【決定方法】について、複数回の教師の介入がなされ、話し合いの開始期に児童たちが難しさを感じやすい部分であることが推察された。また、6年A学級と、5年B学級に共通にみられた助言的介入は【話し合いの流れ】【決定方法】【話し合いルール】であった。それらは話し合いのテーマ等によっても影響を受ける可能性はあるが、高学年児童たちが話し合い開始期に難しさを抱えている部分とも捉えられる。同時期の円滑な話し合いの成立に向け、これらについての理解やスキルを促すことが高学年期の話し合い開始期において重要となることが推察された。

② 児童間の話し合いにおける感情コミュニケーションに関わるテーマの探索的検討

話し合いにおいてどのようなテーマに焦点が当てられるかは、学級内外での児童間の関わりやそれらから生じる問題意識等を含む発達の様相や、教師のねらい等が反映することが推察され、感情コミュニケーション(Saarni, 1999)に関わる問題として重要といえる。本検討ではこうした観点から、学級での話し合いの初期段階にある、低学年（2年）学級の前半期（4月～9月）の話し合いにおいて焦点が当てられたテーマに着目し、感情コミュニケーションの観点から探索的に検討を行った（岩田，教心総会，2022）。

最終的にその日の話し合いのテーマとなった内容としては、【クラスの運営のあり方】【遊び行動上のルールが守られていない状況】【登下校中の危険な行動】【学校生活上のルールが守られていない状況】といった、仲間の行動への注意やその改善を求めるようなテーマのほか、【クラスで共有しうる楽しさの発見や実現化】といった、学級内でのポジティブな感情共有に関わるテーマもみられた。さらに、前半期の後半においては、【より快適なクラスの実現化に向けた行動の見直し】や、【より快適なクラスの実現化に向けた行動】)に関わるものなど、学級全体の快適さを向上させるようなポジティブな行動に関わるテーマにも焦点が当てられるようになった。

教師は、話し合いのテーマの選定に関し、「クラスをより良くしていくために必要なものかどうか」について考えることを促していた。そうした教師のねらいや助言も反映する中で、前半期（後半）には、学級全体に関わるポジティブなテーマにより焦点が当てられるようになっていったことが考えられる。今後こうした話し合いのテーマ性も考慮しながら児童間の話し合いにおける感情コミュニケーションについてさらに検討を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岩田美保	4. 巻 60
2. 論文標題 園の仲間遊びでのポジティブ感情表現としての「かわいい」への言及 その関係調整的役割に着目した3-4歳児クラス期の発達の検討 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.60.2_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 広瀬由紀・岩田美保	4. 巻 28
2. 論文標題 対人面に配慮を要する子どもRを含む対人葛藤場面に関わる検討 Rの道徳的規範の逸脱に取って問題意識を向けない保育者の介入行動と子ども同士の解決方略がもつ働き・意味	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子ども社会研究	6. 最初と最後の頁 71-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57410/jschildstudy.28.0_71	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩田美保	4. 巻 59
2. 論文標題 園の仲間遊びにおける遊戯的なネガティブ感情言及についての発達の検討 - 3歳児クラス期から4歳児クラス期の変化に着目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.59.2_31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 翁川千里・岩田美保・杉森伸吉	4. 巻 20
2. 論文標題 児童の仲間への声かけと役割取得能力との関連 複雑な感情が生じる場面を用いた検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関係性の教育学	6. 最初と最後の頁 119-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51077/epajournal.20.1_119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田美保	4. 巻 163
2. 論文標題 園における集団のなかで育む感情 : 4 歳児クラスの仲間間の葛藤解決をふまえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 広瀬由紀・岩田美保	4. 巻 58
2. 論文標題 対人面に配慮を要する子と周囲の子との関わりの変容過程 - 特性も踏まえた上で仲間として互いに無理なく過ごせるまで -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 105-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20617/reccej.58.2-3_105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 児童間の話し合いにおける感情コミュニケーションの探索的検討:2年学級前半期の話し合いのテーマから
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討10
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 児童間の話し合いにおける感情コミュニケーションの探索的検討:2年学級前半期の話し合いのテーマから
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 園の仲間遊びでの遊戯的なネガティブ感情言及 - 3~4歳児クラス期の言及状況とその関係調整的役割 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩田美保・中道圭人・砂上史子・高橋実里
2. 発表標題 養育・教育環境と 1-2 歳児の言語発達：感情語を含む言語発達と言語的家庭養育の実態と関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 園での仲間遊びで語られる感情 - 3 ~ 4 歳児クラス期の男児間・女児間の感情言及文脈の縦断的变化 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 幼児期の親密な仲間間で語られる感情語の対人機能－「おもしろい」・「楽しい」への言及に着目して－
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会 2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 園の仲間遊びにおける感情言及 - 4歳クラス期の男児間・女児間の感情言及文脈の違い -
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討 9
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩田美保
2. 発表標題 高学年学級の話し合い開始期における教師の助言的介入
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------